
韓流駅伝～5人で繋ぐ愛の襷～

咲良 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

韓流駅伝〜5人で繋ぐ愛の襷〜

【Nコード】

N63680

【作者名】

咲良 紫苑

【あらすじ】

韓国アイドル達の熾烈な戦い！
その火ぶたがきつて落とされた。
勝負の行方は左右の足を交互に前に！
両手をぶんぶんひたすら振り続ける！
そんな単純で美しいスポーツ、駅伝。
さあ、勝負の行方は！？

プロローグ（前書き）

この話は、東方神起がメインに展開されます。
が、

キャラが全然違う！

。。。はこんなキャラじゃない！

等のことは、ご自身の脳内で処理してくれますよう、お願いいたします。

私の頭の中でも、脳内野党がヤンヤンヤ言っておりましたが、強硬突破して作品を公開することにいたしました。

ちなみに、私は2U信者です。

かなり毒されていますので、読みたくない方はエッセイでも読んでくださいね↑どさくさにまぎれて宣伝してみました。
よろしく願います。

ブローグ

韓流駅伝。

それは箱根駅伝の裏番組として、人知れず行われているもうひとつの男たちの熱き戦い。

優勝したグループには彼らの熱い絆を称え、永遠のアイドルの称号である『シャイニングカップ』が授与される。

今年も様々なグループが参加を表明している。

韓流駅伝初心者あなたにもわかるよう、優勝候補を教えよう。

まず、赤い襷を肩にかけるスーパージュニア。

彼らは歌にドラマにバラエティ、そしてモデルまでもをやりこなす、スーパーエンタメ集団だ。

韓流駅伝に華麗なるドラマを巻き起こしてくれること、間違いなしだ。

そして次に、ダークホース、ビッグバン。黒い襷をシャープにかけ

彼らはカリスマ性抜群のリーダーを筆頭に、それぞれの個性的な世界観が折り重なり、生み出す彼らの音楽は見る者を魅了し感服させる。協調性もさながら、個人プレーにも注目が集まる。

そして、私が一押しなグループ。

青い襷は韓流アイドルのさきがけ、東方神起だ。

今、彼らを取り巻く環境は厳しいかもしれない。

だが、彼らをつなぐものは、襷よりも強い絆だ。

不穏な噂も蹴散らす、そんな走りを期待する！！

おっと。

そろそろスタート時間のようだ。
では、韓流駅伝を楽しんでくれたまえ。

プロローグ（後書き）

次はスタートの1区！

スタートの1区

ユノ「ジュンス。君ならできる。韓流駅伝の1区は君しかないんだ。なぜなら、君のどんなトークにもギャグで切り返す能力は、協調性の極みだ。塊になってすすむこの1区は、ジュンス、君のためにあるような区間だ」

ジュンスは1区を走りながらスタート前にユノに言われたことを思い出していた。

前にはライバル、スーパージュニアのシウオンがジュンスに抜かれまいとペースをあげていく。ジュンスは食らいつく。しかし苦しい自分のペースをあげたくても、前にいることと思うようにあげられない。

（く、くそう。ダメだいいのが思い浮かばねえ。だけど、ユノヒヨンの期待は裏切れねえ。こうなったら…）

「箱根駅伝、は！？来ねー！？え！？きでんねー（聞いてねー）」
ジュンスははつきりとシウオンの耳元で言い放った。

「ジュ、ジュンス。それはいくらなんでも…無理が…あ…る…」

シウオンは、ジュンスの渾身のギャグだけど、そのギャグから滲み出ている無理矢理感に耐え切れずに、大幅に失速した。その瞬間を逃さずにジュンスはシウオンを抜き去った。

韓流駅伝を中継しているラジオでジュンスがシウオンを抜き去ったことを聞いたユノは一人、してやっつたりの笑みを浮かべた。

そしてジュンスは1区を10チーム中3位の上位で呪文中継所に入り、櫓を2区のジェジュンに渡すことになる。

スタートの1区（後書き）

次は花の2区！

花の2区

僕は呪文中継所のスタートラインにたった。もうすぐ、ジュンスが3位という好ポジションでゴールするとスタッフに聞かされた。

足首をグルグル回しながらジュンスを待っていると、最終コーナーを曲がり、ジュンスが近づいてくる。

だが僕は運痴だ。はつきりいつて、走りきる自信はない。

ジュンス「ジェジュン！！君が走るのは花の2区だ！！東方神起のビジュアル担当！！君にしか走れない！！この襷をたすく！！（たくす）」

ジェジュンの中でスイッチが入った。

ジェジュン「そう、俺はイケメン。ラーメン、つけめん、ジェジュイケメン！！ジュンス！！君のつまらないギャグも僕の前では輝きだす！！観衆よ！！僕の美しい走りをおさめなさい！！」

ジェジュンは軽やかに走り出した。

ジュンスは、荒らぶる呼吸に苦しみながら、呪文中継所直前に併走していたユノから言われた言葉を思い出す。

ユノ「ジュンス！！よくやった。ジェジュンに襷を渡す時、花の2区を走れるのは君しかないんだと伝えてくれ。ジェジュンはそれでいつも以上の力が出る。」

韓流駅伝、2区は花形選手が集う、いわば韓流駅伝一、華やかな区

間だ。

ジェジュンは3位をキープをし、前半戦を終えた。しかし、恐ろしい事態が東方神起を襲うことになる。

ジェジュン「はああ、なんて爽やかなんだろう。そう僕が」

ジェジュンは観衆の黄色い声に酔いしれていた。

後ろから、スーパージュニアのヒチヨルが追いつていることにも気づかずに。

ヒチヨル「やあー!!ジェジュン、花の2区の姫、ヒチヨルだ。君はせいぜい、貧乏花、僕は情熱の赤いバラだ!!」

ジェジュン「なんだって!!!そんな派手なユニホームなんて着ているやつに言われたくはない!!!本当に美しいのはこの肉体だ!!!」

走りながらもみ合う二人。その様子に歓声が更に大きくなる。調子に乗った二人は足を止め、ポーズをとりはじめる。

どちらが真の花の2区の花なのかを決める決戦の火蓋がきつて落とされた。

ユノは、ラジオ中継を聞き、啞然とした。なんと、ジェジュンが次々に抜かされているという。しかも、ジェジュンは悩殺ポーズをきめているとラジオは淡々と伝える。

ユノ（俺としたことが…俺のミスだ。まさか、スーパージュニアも「花」の2区を餌にして運痴を克服させようとしていたなんて…）

うなだれるユノのもとに、一本の電話がかかってくる。3区を走るチャンミンからだ。

「ヒョン…ラジオ、聞いてますよね？次の併走ポイントでこう、ジエジュンに伝えてください。僕を怒らせていいと思ってるんですかー！！さつさと襷を渡さないと、お前の恥ずかしい写真をばらまくぞ！！オラー！！と」

ユノは、ポーズを決めつつ少しずつ進んできたジエジュンが併走ポイントにさしかかった途端にチャンミンからの伝言を伝えた。

ジエジュンは血相を変えて再び走りだす。

この時順位は10校中9位。後ろにはスーパージュニアのヒチョルがいるのみ。

果して、3区の行方は！？

花の2区(後書き)

次は潮風の3区！

潮風の3区

紫の線中継所にやってきたジェジュンの顔色は悪かった。

きつと僕の怒りを恐れていたんだろう。

ジェジュンの冷や汗がたつぷりと染み込んだ襷を受け取り、僕は走り出す。

ジェジュン「チャンミン、ゴメンーだから、あの写真は流さないでー」

チャンミン「東方神起が優勝できなかったら、流しますよーでも、今日の僕はキレています。安心して僕の走りを見ていてくださいよー」

ブラックの中にも天使がかいま見える男、チャンミン。

チャンミンが走るのは、韓流駅伝1番の難所、潮風の3区だ。3区は海からの強い風を受けながら、緩やかに続く坂を登っていく。地味なコースと思われるが、実力のある者しか走ることができないのだ。

チャンミン（ダメですね。ジェジュンヒョンが一気に9位まで落ちたせいで、僕の計画が台なしです。しかも、4区を走るのは、あのユチョンヒョンです。あの人は心まで乙女だから速く走れるはずがない。僕が少しでも順位をあげなければ）

チャンミンは冷静に状況を判断し、ひたすら両手両足を動かし続けた。

その姿はまるで海を撫でる潮風のごとし。

刹那で過ぎ去るチャンミンの姿に、他のチームも動揺を隠せない。チャンミンの弾丸ペースに惑わされ、自分のペースを失い、自爆していく選手もあとをたたない。

ユノはチャンミンの走る姿を中継するラジオを聞き、一人涙する。
東方神起の裏番は君だ…と…

チャンミンは無心だった。

前に行く、無名アイドルチームを追走していると、2回目の給水所にたどりつく。どうやら1回目は気がつかなかったらしい。
給水所にはジュンスが立っていた。

ジュンス「チャンミン！！このまま行けば区間新記録だ！！」

区間新記録！？

やってやるうではないですか！！

そう思い、前の無名アイドルチームを抜こうとした。

無名A「無名B〱僕が飲んだペットボトルで給水すれば、スタミナミナギル！！」

無名B「ナミナミにスタミナアップ！！サランヘ」

思わずチャンミンはバランスをくずした。

なんなんだ、このバカップルは！！ユノヒョンとユチョンヒョンを思い出す。

くそう

せっかくいいペースだったのに。

チャンミンは怒りに任せて雄叫んだ。

チャンミン「イエーッフォー（怒）」

無名アイドル達は、チャンミンの雄叫びにより、鼓膜をやられてよろめく。

チャンミンの雄叫びは、相手の力を弱め、自分の力を強める、隙のない二段構えなのだ。

更にチャンミンのスピードは加速する。こうなってしまったては、誰もチャンミンを止められない。

ラジオ「東方神起のチャンミン選手、凄まじいスピードです。ごぼう抜きで1位に踊り出ました。もう、新記録は間違いないでしょう。どうですか？ペ・ヨンジュンさん。」

ペ「そうですね、まるで若い頃の私を見ているようです。さあ、若者よ、走れ！！カモシカのように！！流れる！！ほうき星のように！！！！」

チャンミンはあっという間に4区のスタートライン、どうして君を好きになってしまったんだろう中継所にやってきた。

果して、流星と化したチャンミンにユチヨンの存在は見えているのか！？

襷は無事にユチヨンに渡すのか！？

潮風の3区（後書き）

次は山登りの4区！

山登りの4区

信じられない。

僕が聞いていた情報によると、僕たち東方神起チームは単独9位だったはずなのに、チャンミンが1位で、もうラスト1キロまで迫っているらしい。何があっただろう。

ユチョンはまだあたたまりきらない体のままスタートラインにつく。ものすごい勢いで走ってくるチャンミン。襷はすでに右手に持っている。

ユチョンは襷をチャンミンから受け取ると、チャンミンが発していたあまりの熱さに少し襷が焦げていることに気がついた。

チャンミン「ユチョンヒョン、僕がだいぶタイムをかせげたみたいです。遅くてもいいんで、しっかりユノヒョンに襷リレーしてください」

ユチョン「チャンミン、ありがとう。僕、できるだけ頑張るよ」

ユチョンは襷を肩からさげ、横目で区間新記録を大幅に更新したチャンミンがインタビューを受ける姿を見守った。

ユチョンが走る4区は東方山の山道だ。

「東方の山は神の山」と昔から言われるように、この山には何かに住んでいるようだ。一気にペースを落としてしまう選手も多い。なぜ、乙女なユチョンがこの過酷な区間を選んだのか。それは、た

だ一重に「ユノに襷を渡したい」という願いだけなのである。

ユチョン「はあはあ、もう…つらい。なにこの山道…なんでみんなそんなに早いのか…」

ユチョンは女の子にみまごう程が弱い存在である。せつかくチャンミンが稼いだタイムもなくなり、次々に抜かされていく。太陽の光がジリジリと刺し、ユチョンの体力を奪う。

ユチョン「はあ、もう…ダメ…」

ユチョンは倒れ込みそうになる。

ジュンス「ユチョン、ヒッヒッフーだ！！ヒッヒッフー！！ヒッヒッフー！！」

併走していたジュンスがユチョンに話かける。

ユチョン「ヒッヒッフー！！？ヒッヒッフー、ヒッヒッ…ダメだ！！この呼吸だと、今にもユノとの子供が生まれてしまいそう…」

ジュンス「ああ！！ユチョン！！」

ジュンスの目の前でユチョンは倒れ込んだ。

ユチョンはうすれゆく意識の中、韓流駅伝の前日にユノと語り合ったことを思い出した。

ユノ「ユチョン、君が僕に襷リレーをするときに伝えたいことがあるんだ。だから、何がなんでも僕のもとにたどりついてくれ」

ユノ…僕、東方の山で死ぬのかな…最後にもう一度、ユノの声が聞きた…かつ…

ユチヨンが意識を手放しかけたその時

一輪のバラが地面に突き刺さる。

ユチヨン「これは…まさか」

「おまたせ！！私はピュアーな乙女を助ける一輪のバラ！！実は、君のファンだ！！とーう！！」

まさかこのタキシード眼鏡が東方の山に住む…神…！？

タキシード眼鏡はユチヨンをお姫様抱っこするとマントを翻しながら東方の山道を走り抜ける。他の選手達は神の降輪に驚きを隠せない。タキシード眼鏡は高笑いしながら突き進み、現在トップのビツグバンのトップ選手を追い抜く。

このまま最後の中継所、ボレロ中継所にたどり着くかと思われたが、ユチヨンはゴールがまだ見えない位置でタキシード眼鏡の手をふりほどいた。

ユチヨン「ユノは嫉妬深い男よ。ここで僕を降ろした方があなたの身のためよ」

タキ「ユチヨン、私は君が…」

ユチヨン「ごめんなさい。僕との仲は諦めて」

ユチヨンは呆然と立ちすくむタキシード眼鏡を置き去りにし、1位で愛するユノの元へ駆け寄った。

山登りの4区（後書き）

次回、韓流駅伝感動のフィナーレ!!

終局の5区

ユチョンが途中で倒れたとラジオで聞いた時、俺はそばにいたことができないもどかしさをウォーミングアップにあてるしかなかった。関節を外し、くねらせる俺の独特なウォーミングアップだ。ユチョンが心配すぎて多少激しくやりすぎたようだ。おかげで俺の周りからは人がいなくなった。

スタッフ「東方神起のユンホさん、ユチョン選手1位でこちらに向かっていきます。あと1キロです。ビッグバンのGドラゴンさん、トップ選手、僅差で2位です。準備をお願いします。」

「なんだって！？倒れたんじゃないのか！？ユチョンは無事なのか！？」

スタッフ「ええ。周りのスタッフの情報によると山の神に愛されていた。とのことですよ」

ユノ「ユチョン……！！東方の山の神までも虜にするなんて…君は駅伝の女神だ……！」

ユノはボレロ中継所のスタートラインに向かって歩きだす。

Gドラゴン「東方神起のユンホさん。僕はビッグバンのリーダー、Gドラゴンです。あなたは確かに日本の韓国アイドルブームの火付け役だったかもしれない。だが、今は僕たちの時代だ。ユンホさんには悪いが、一位の座は僕たちビッグバンがもらう」

ユノは黙ってGドラゴンの言葉を聞く。

「確かに、今は君達ビッグバンの人気はウナギのぼりだ。だが見ていてほしい。俺たち東方神起の絆の深さを！！特に俺とユチヨンの愛の美しさを！！俺達にはあるが、君達に足りないものを、ゴールのライジングサン中継所で見せてあげよう。」

ユノはユチヨンがもうすぐここにやってくるうれしさでGドラゴンの厭味にも笑顔で答えることができた。

さあ！！もうすぐ愛するユチヨンに会える！！

スタートラインで両腕を広げて晴れやかに待つ。

ユチヨンの姿が見えてきた。

愛らしいユチヨンの走りっぷりについて、頬が緩む。走ってもいないのに鼓動がはようになっていく。

ユチヨン「ユノ！！言いたいことって！？」

ユノ「ユチヨン！！俺達二人で人生という道をいつまでも共に走ろう！！愛している！！」

ユチヨン「……！！ユノ！！」

ユチヨンはユノに飛びついた。

見事なジャンピングハグである。

二人の時は止まった。

深い深い抱擁をかわす二人。

「あはははは」

「うふふふ」

二人の楽しそうな笑い声がボレロ中継所を包み込む。

ユチョン「ユノ、僕…」

ユノ「待ってくれ、返事はライジングサン中継所で聞かせてくれ。もし今フラれたら、俺、走れなくなるから」

ユチョン「……わかった、ライジングサン中継所で待ってる」

二人は再びきつく抱き合う。

チャンミン「オラー！！！！！！二人してなにやってんですカア！！！！！！さっさとスタートしないからビッグバンに抜かされたじゃないですかー！！」

ユチョンの後ろから監督車に乗ってきたチャンミンがトラメガを使って叫ぶ。

ユノは慌てて、しかし慎重にユチョンを地上におろすと、その長い足で強く地面をけりあげた。

目の前を走るGドラゴンを追いかける。

Gドラゴンは強い。

なぜなら、彼はカリスマと持て囃され、周りから一目をおかれてい

る。それがゆるぎない自信として彼に力を与えるのだ。メンバー達も、Gドラゴンには一步距離をおいているくらいだ。

ユノは必死にGドラゴンの背中に張り付く。

ユノもまた、強い。

どんな誹謗中傷にも堪え、メンバーを、そしてファンを守ってきた。そしてユチヨンという、かけがえのないパートナーを見つけた。ユチヨンを喜ばせるためにも、ここはGドラゴンには負けられない。

ユノは持てる力を全て出し、Gドラゴンにならんだ。

Gドラゴン「ユンホさん、なかなかやりますね。それに、あなたのユニホームもなかなかだ。それは、脚力をあげるのかな？その、コマネチユニホームは…」

ユノは自分の下半身を見た。そこには信じられないことにサスペンダーが股下で交差し、ブリーフパンツのようになっていた。

「俺、この恰好でユチヨンにプロポーズしたのか!？」

ユノは足元が崩れていくのをかんじた。

もうだめだ…一生の不覚だ…ああ、ユチヨン…

一気に突き放されるユノ。

監督車に乗っていたチャンミンは全てを察した。

そしてこう、言い放つ。

「ユノヒョン！！君はコンサートでも同じことをやった！！もつと大勢の前で！！その時もユチョンは見ていたじゃないか！！今更だ！！潔く諦める！！男同士でいちゃつくな！！目障りだ！！それでもいちゃつきたいと言うならば、勝って結婚しろ！！そしたら僕は諦める！！」

チャンミン！！
チャンミン！！
チャンミン！！

ああ、東方神起の裏番：

君の許しが出るならば俺とユチョンは思う存分ラブラブできる！！
ユノは最後の力をふりしぼり、再びGドラゴンに並ぶ。

ユノ「君にはこれがコマネチサスペンダーに見えるかもしれない！！だが、これは東方神起の愛の形なんだ！！こんな姿のリーダーをも見捨てずに5人でここまで来たんだ！！負けてたまるか！！！！」

ライジングサン中継所にはジュンス、ジェジュン、ユチョンの3人がすでにユノを迎える体制を整えていた。

ユチョン「ユノ、またコマネチになっていた。これからは、僕が妻としてコマネチを未然に防ぐ役目をはたさなきゃ」

ジェジュン「これからは2Uをカモフラージュするユンジエの役割もないのか」

ジユンス「ユノヒョンはもてるからねー男からも」

ジェジユン「あー！見て！！！！！！あれ！！」

ジェジユンの指差す先には渾身のスパートをかけるユノとGドラゴンの姿があった。

ラジオ「見てください！！ライジングサン中継所500m前に東方神起ユノホとビッグバンのGドラゴンが現れました！！どちらも一歩も譲らず！！」

ユチヨン「ユノー！！！！！！コマネチでも好きだー！！！！！！！！」

ユノはカッ目を見開くとGドラゴンの前に踊り出し、僅差でゴールテープをきった。

東方神起、韓流駅伝制覇！！！！！！！！！！

ユノホのあとを監督車で追っていたチャンミンは、ユノホをだき抱え絡み合いながら喜ぶ4人の姿を見つめ誰に気づかれることもなく、涙を流す。

これでこそ、東方神起だと。

Gドラゴン「俺が…負けるなんて…」

ユノ「Gドラゴン、君達になくて僕達にあるもの…それは絆の強さだ。男同士の熱い愛情だ。君達は確かにかっこいい。だがファンを喜ばせるには男同士の真の愛情が必要不可欠なんだ。」

Gドラゴン「男同士の…真の…愛情…」

ユノ「もつと積極的にメンバー同士で絡め。それが俺から君への最初で最後のアドバイスだ。良い試合をありがとう。」

壮絶な韓流駅伝の戦いは終わった。

その30分後、東方神起は表彰台の一番上でシャイニングカップを受け取った。

笑顔のジュンス

イケメンジェジュン

裏番チャンミン

乙女ユチョン

そして

コマネチ…いや、真のリーダーユノ

5人の笑顔は永遠に続く。辛い時間は、強さとなって彼らを支えるだろう。

終局の5区（後書き）

どうでしたか？

キャラが崩壊していましたが、ここまで読んでくださりありがとうございます。
ございます。

うれしゅうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6368o/>

韓流駅伝～5人で繋ぐ愛の襷～

2010年11月8日16時59分発行